

階

【きざし】

～社会科教育を考える～

No. 49

2023年7月

- 池上彰のインタビュー④
僕は、詩も言葉も信用していない詩人です 2
谷川 俊太郎 詩人
- わたしの一里塚
チョコレートのその先へ 8
田口 愛 Mpraeso合同会社 代表社員
- ここに教育あり
領事館プロジェクト
～キラリと光る津島の教育～ 10
浅井 厚視 愛知県津島市教育委員会 教育長
- 社会と教育の架け橋
社有林を活かした環境教育プログラム
王子の森・自然学校 12
石井 真樹子 王子ホールディングス株式会社 広報IR部 マネージャー
- 異国日本の地に立って
消えゆく歴史を追い、
未来へと発展させていくための糸口を探る 14
ボルジギン・フスレ 公益財団法人 守屋留学生交流協会 第18回奨学生
- 子どもと、ともに
「ボッチャ」と「eスポーツ」で
コミュニケーション力、主体性を育む 裏表紙
群馬県立あさひ特別支援学校
- 資料
江戸城
260年の太平の世を支えた世界最大級の城郭



池上彰のインタビュー
今回は 谷川 俊太郎 さん

子どもと、ともに (裏表紙掲載)

今回は群馬県立あさひ特別支援学校の取り組み



「この場所に投げて！」戦術を話し合い、変更しながら、心技体が試される瞬間 (全国ボッチャ選抜甲子園・2018年)。

池上彰の インタビュー

vol.49



僕は、詩も言葉も 信用していない詩人です

詩人の谷川俊太郎さんは、子どものころから字を書くのが苦手で勉強が嫌い。一斉に同じことをやらされる学校も嫌いだっただけです。たぐいまれな言葉への感性は、どこから生まれたのでしょうか。詩作を始めて70年以上。91歳となった今、これまでの創作活動を振り返り、詩や言葉、日本語のありかたについて、お話をうかがいました。

このインタビューは、2023年2月20日、谷川さんのご自宅にて収録しました。

詩を書く以外、何も能がなかった

池上 国語の教科書で谷川さんの詩をご覧になっている読者も多いと思います。谷川さんはいつごろから詩を書き始めたのですか。

谷川 高校を卒業したころからです。僕は学校が嫌いで、大学に行きたくないと思っていました。みんなと同じことをさせられるのが嫌でね。当時、詩を書いている友人がいて、その詩が好きだったんです。そんな友人たちを見て、「これなら自分にもできそうだ」と思いました。宮沢賢治の詩は読んでいたし、自分もそっこのほうが向いているなという気がして、大学ノートにボチボチと詩を書き始めたんです。

池上 お父様の谷川徹三さんは哲学者で、法政大学の総長もなさっていましたよね。

谷川 父には、「大学も行かずにこれからどうするんだ」とたずねられました。私は全くインテリじゃなかったし、どちらかというとインテリに反感を持っていました。これからどうするかと聞かれても、自分でもどうしたらいいのかよくわからない。今自分が持っているのはこれだけだと思い、ノートに書いた詩を父に見せました。父は宮沢賢治の研究者で、若いころ詩を書いていたような男でした。それに親バカだったのでしよう。悪くないと思っただけで、父の知り合いで、当時、詩人として有名だった三好達治さんにそのノートを見せてくれたんです。

池上 そこで三好さんが谷川さんの詩を評価されたということですか。

谷川 僕は、それがありがたいことだともよくわからなくてね。私の最初の詩集『二十億光年の孤独』の巻頭に三好さんが詩を寄せてくださった。



撮影 吉永考宏

詩人

たにかわしゅん たろう
谷川俊太郎

1931年、東京生まれ。詩人。1952年、第一詩集『二十億光年の孤独』を刊行。多数の詩集、散文、絵本、童話、翻訳があり、脚本、作詞、写真、ビデオも手がける。1983年『日々の地図』で読売文学賞、1993年『世間知らズ』で萩原朔太郎賞、2010年『トロムソコラージュ』で鮎川信夫賞、2016年『詩に就いて』で三好達治賞など受賞多数。代表作に『六十二のソネット』『旅』『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』『はだか』『私』など。近刊に『へいわとせんそう』など。



ジャーナリスト
いけがみ あきら
池上 彰 (聞き手)

1950年、長野県生まれ。ジャーナリスト。名城大学教授。慶應義塾大学卒業後、73年、NHK入局。報道記者として勤務。94年から11年間、「週刊こどもニュース」で子どもたちにわかりやすくニュースを解説。2005年、NHKを退局。『池上彰の君と考える戦争のない未来』（理論社）、『池上彰の社会科教室』（帝国書院）など著書多数。本誌の対談を集録した『池上彰が聞いてみた「育てる人」からもらった6つのヒント』（帝国書院）も好評発売中。最近はオーストラリアの環境意識の高まりを取材。

影響を受けた詩人・童話作家 宮沢賢治

池上 そのように自然に言葉が出てきて詩が書けるなんて、私にはとてもうらやましいことです。子どもの頃から本をたくさん読んでいたのですか。

谷川 僕ね、あまり広く本を読んでいないんですよ。ドストエフスキーもトルストイもチェーホフも、夏目漱石すら読んでいなかった。本よりもずっとラジオが好きで、ラジオを夢中で組み立てていた。鉱石ラジオから始まって、真空管ラジオを使うようになり、海外の短波を聞きたくまりました。オーストラリアやアメリカの放送が入るとすぐうれしくてね。言葉が違うのを楽しむだけで、意味は全くわからないのですが。コールサインや放送局の雑音が聞こえると、「聞こえた、聞こえた」と喜んでいました。いい詩が書けたときよりずっと感激しましたね。

池上 いい詩が書けたときよりですか（笑）。ラジオで英語を勉強したということでもないんですね。

谷川 ラジオの内容はどうでもよかったし、僕は勉強が嫌いなんです。家にはうんざりするほど本があらんでいて、父の本棚にモーパッサンの『脂肪の塊』という本がありました。「ちょっと官能的だな」と思って読むことはありません。寝床でこっそり読んでいたら母親に取り上げられました。そんな読み方しかしていません。

池上 ハハハ。でもあとから考えたら小学生のときにモーパッサンを読んでいたわけでしょう。

谷川 一応一冊だけね。あとは、父が研究していた宮沢賢治の本がたくさんあって、それはずいぶん読みました。詩よりも童話が好きで、宮沢賢治からは

池上 それは強い味方がいましたね。世間は谷川さんのことを、「三好さんが評価している詩人」と受け止めますよね。

谷川 そうですね。だから、詩人として恵まれたスタートだったと言われています。でも、詩集なんて売れませんか、詩で生活はできません。母には心配して泣かれましたし、私にとっても、どうやって食べていくかということは大問題でした。詩を書く以外、ほかには何も能がありませんでした。

仕方がないから自分でできる仕事は何でも引き受けました。一九六四年の東京オリピックの記録映画の脚本や、ラジオドラマなどを書いて食いつないでいました。

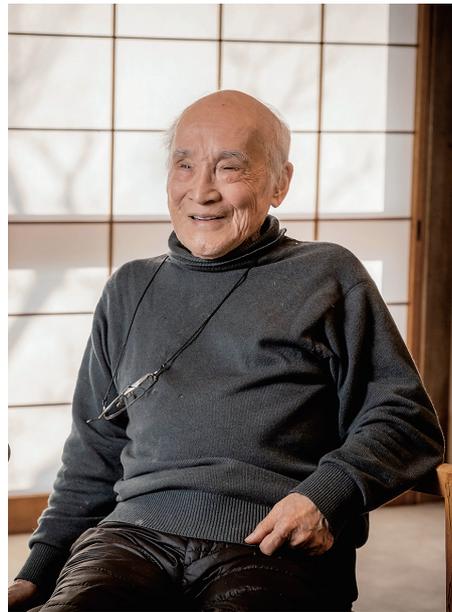
池上 しかし、よく仕事の依頼が来ましたね。

谷川 本当にそう思います。僕は「締め切りの一か月前には納品する」ということで有名なのですが、締め切りを守ってビジネスライクに仕事を受けていたんだと思います。

池上 それにしても、友人が詩を書いていたのを見ただけで、誰もが詩人になれるわけではありません。谷川さんは、詩を書き始める前から、詩や言葉に対する造詣や特別な思いがあったのでしょうか。

谷川 なかったと思いますよ。書き始めてからも、深刻なことは何も考えず、ただ何となく出てくるおもしろい言葉を書き留めていた。詩について考えるようになったのも、言葉について考えるようになったのも、ずいぶん後のことですね。

詩は現実を抽象的な言葉で表現したもの。 言葉と言葉のつながりが詩になる瞬間をつかむ。



味があるのですか。

谷川 意味はないんです。彼の独創でしょう。宮沢賢治は既成の言葉にこだわらないところがあります。僕もわりと既成の言葉にこだわらないで詩を書こうと思っていました。

池上 谷川さんの詩はそういうところも非常に新鮮で、評価されたのでしょうか。

谷川 最初の詩集が『二十億光年の孤独』なのですが、孤独というと多くの人は人間間の孤独を考えるでしょう。だけど僕はひとりっ子で母親に愛されていたので、一人で遊んでいても人間関係の孤独は感じていませんでした。孤独といえば宇宙のなかの孤独だとはじめから思っていた。ですから自分にとって「二十億光年の孤独」はリアルな言葉なのです。みなさんには新鮮に聞こえたのかもしれませんが、池上 当時は宇宙が二十億光年くらいの広さだとされていきましたね。今、宇宙は一三八億光年だといわれています。

現実から詩が生まれる

谷川 あの頃と比べると、宇宙の広さはずいぶん膨大になってきました。最近言葉もずいぶん抽象的になってきていると感じます。自分の身の丈に合わない、頭のなかでしかイメージできない言葉が増えてきました。

例えば、戦争の報道もそうです。僕には、第二次

世界大戦の頃の具体的な戦争体験があります。B29の空襲で焼夷弾が落ちたことや、翌朝に友だちと自転車で見に行くと焼死体がゴロゴロしていたこともあります。しかし今では、みなさんはそういう具体的な体験はないわけでしょう。知識としては以前よりもたくさんあるけれど、言葉が実感をとまわらないことが多いです。言葉を聞いても、もうひとつピンとこないことが多いですね。

池上 確かに戦争の報道は抽象的ですね。日本ではテレビ局がとにかく死体を映さないようにしています。東日本大震災があつたときも、日本の国内では津波の被害者の映像は出ていませんが、海外のテレビでは映っていました。

谷川 そうした現実が抽象的に表現される習慣は、詩を書いている人間にとっては「リアルなものがない」という感じがします。詩は抽象的な言葉で書きますが、現実が基になっているものから。

池上 つまり、極めて現実的なものを、詩という形で抽象的なものに昇華させるわけですね。そのプロセスはどのようになっていくのでしょうか。

谷川 それは脳科学者に聞かないとわかりませんね。ただ、最初にイメージするものが具体的なものでも、一種の観念のようなものでも、言葉は次々と連想を生むでしょう。その面白い連想を書き留めることが最初のプロセスとしてあるようです。

その言葉と言葉の組み合わせが、あるときポエジーという、普通の散文とは少し違う言葉のつながりを生むことがある。その瞬間をつかむことがいちばん大事です。どこから詩になるのかはとても微妙で、人によっても、経験によっても変わっていくものなのですが、「これで詩になっている」「これは詩じゃ

かなり影響を受けていると思います。『北守将軍と三人兄弟の医者』は、『グスコープドリの伝記』ほどには有名ではない作品ですが、好きでした。
池上 私は『グスコープドリの伝記』に感激しました。あれは今でいう「温暖化」についてのお話ですよ。火山を噴火させて二酸化炭素を増やせば寒冷地が暖かくなる——と。よくそんな知識があつたなあと思ったものです。
谷川 彼は農業関係の知識をかなり勉強していますね。僕は、宮沢賢治の言葉の使い方が好きなんです。今でもよく覚えているのは、『蛙のゴム靴』という作品で、カエルたちが雲見をする場面です。「どうも実に立派だね。だんだんペネタ形になるね。」と、カエルが平たい雲を見て言うんです。
池上 初めて聞きました。「ペネタ形」とは何か意

ない」というその判断が勝負どころだと思えます。池上 谷川さんは、長年、言葉の世界で仕事をしてこられました。最近の「言葉」について何かお考えになつてゐることはありますか。

谷川 とにかく量が多すぎますね。世界全体がもっと無口になつてほしい。

池上 インターネットやSNSも含めて、饒舌すぎるということですか。

谷川 そうですね。言う必要のないことを言っている人がたくさんいるような気がします。でもそれが商売になつてゐるのだから、一概に否定はできませんけれど。古い人の詩を読むと、現代人に比べると本当に言葉が少ない。それは意識的に減らしてゐるのではなく、自然に少ない言葉が出てきて詩になつてゐる。先日、井伏鱒二さんの詩を読み直しましたが、現代詩の言葉と出どころが違うんです。言葉が人間全体から出ているというか、現実の肌触りに正確に結びついています。

池上 昔の詩はそんなに饒舌ではなかったということとは、一つひとつの言葉や文字を大切にしていたということなのでしょう。

谷川 それはもちろんありますが、人格の問題かもしれません。詩を書く人の人格、人となり。生活のなかで無駄なおしゃべりをしないことも含めての人格です。この辺りのことを伝えるのは難しいですね。僕は詩を書き始めたころから、あまり言葉というものを信用してゐなかつたんですよ。今もって信用してゐないんですけれどもね。

池上 言葉信用してゐない。

谷川 はい。そして、言葉よりも詩をもっと信用してゐませんでした。信用してゐないから、詩を書い

言葉を信用してゐないからこそ、

詩を書き続けることができた。

ても、書いても、「こうでもない、こうでもない。もっと自分の感じている真実があるはずだ」と、詩を書き続けてこられました。子どものころから、言葉というのはその人間にぴったりついておらず、浮いてゐるという感覚を持つてゐました。

池上 それはつまり、自分の気持ちを言葉でうまく表せないということですか。

谷川 というより、人に不快感を与えずに自分の気持ちを伝えるためには、どこかに嘘が混じつてしまふという感覚です。嘘が混じつてゐることが言葉による創作なのかもしれません。それがどうしても気になつてしまふんです。だから、嘘が混じつてゐない言葉が自分から出てくるとすごくうれしい。そんな言葉はなかなか出てこないのですが。

池上 そうすると、谷川さんがよくできたと思える詩は、嘘が混じつてゐないということですか。

谷川 全部嘘が混じつてゐるからよくできてゐる(笑)。

池上 なるほど、だからみなさんに受け入れられる。

谷川 簡単に言うとうそです。

池上 嘘がないと受け入れられないのでしょうか。

谷川 どうでしょうね。僕の詩集に、いろんなものを定義した『定義』という詩集があります。本来、定義には嘘の入りがないわけですが、詩集として評判にはなりません。いや、詩集として変わつてゐるという意味で評判になつたのかな。

たとえばリンゴなら、色はきれいだし、おいしそ

うだし、においはいいし、切つたらもちろん食べられる。そんなふうに表示することはできませんが、リンゴ全体を言葉で表そうとしても言い切れない。それをどうにかうまく面白く言語化しようとした詩集が『定義』です。数学の定義とは全く違つて、結局「そのもの」からずれていきましたね。「いくら言葉で言つても言いきれない」と定義するしかありませんでした。

池上 何かを表現したいとき、言えば言うほど本質からずれてしまふというもどかしさは、確かにあります。

日本語の未来

谷川 日本語はわりと情緒的な言語で、論理的な側面が薄い。道順ひとつも文章で正確に書くのは難しい。言葉にはどうしてもいかさまが混じつていくということが本質的にある、と思つてゐます。

池上 私は記者時代、ものごとをわかりやすく人に伝える訓練のひとつとして、駅から自宅までの道順を人にどう説明したらいいかを頭のなかで組み立ててゐました。

谷川 それは、僕と完全に同じ発想ですね。

池上 たとえば渋谷駅からだと、「渋谷駅のハチ公口を出ると目の前が広場になつていて、そこに忠犬ハチ公の像がある。その先に行く道路が3つに分かれていて……」などと練習しました。その場所

を見たことのない人の頭のなかに絵が浮かぶように説明するには、どのように表現すればよいのかと考えていました。

谷川 それが本当に大変なんですよ。今はもうスマホで検索して一目瞭然ですから、そういう言語教育は成り立たなくなりましたね。

池上 よく「最近の若い人の言葉は乱れている」と言われることがあります。谷川さんは乱れていると思いますか。

谷川 言葉はもともと乱れるものだと思っているので、あまり気になりません。乱れた言葉が新鮮な場合もある。そういうときはその言葉を使いますね。

池上 確かに、たとえば「うれしい悲鳴」などは、今だと手垢のついた表現ですが、最初に使った人は新鮮に感じただしょうね。

谷川 その人は詩人だったんじゃないの？

池上 そうかもしれません。初めて聞く言葉は真新しいからよく使われるようになり、そして手垢がついていく。そう考えると、詩作というのは手垢がついていない新鮮な言葉を何とか探さそうとする作業でもありますね。

谷川 そうですね。ただ僕も、つい惰性で手垢のついた言葉を使ってしまう。するとその表現がとても気になって、書き直したくなりますね。

池上 今後、日本語の未来はどうなると思いますか。
谷川 それは、世界の未来が今後どうなるかに関わってくるから簡単に言えません。一時期は、国語の教科書に宮沢賢治などの近代詩が載っていました。最近では近代詩が載らなくなってきたのではないのでしょうか。若い頃は特に気になりませんでした。年を取ると、日本の昔の言葉は知っていた

説明すると詩そのものが死んでしまう。 散文に戻ってしまおうんです。

ほうがいいと思うようになった。古典はやはり大事だとしみじみ思うようになりましたね。今の国語教育は古典をダイジェストで教えるだけじゃないかな。

池上 その傾向はあるでしょうね。漢文の掲載は少しずつ減ってきています。

谷川 漢文脈というのは日本語の背骨のひとつなんですけれどね。

池上 2022年度から高校の国語に「論理国語」と「文学国語」という科目が設定されました。「論理国語」では実社会において必要となる、論理的に書いたり批判的に読んだりする力の育成、「文学国語」では深く共感したり豊かに想像したりして、書いたり読んだりする力の育成が重視されています。このことについてさまざまに論争も起こっています。谷川さんはどうお考えですか。

谷川 先ほどもお話したように、駅から自分の家までの道順を正確に書くということも言葉の大切な要素のひとつです。それが少ないがしろになってしまふのが日本語です。日本語には論理的ではない部分があるので、国語の教科書はまず日本語の論理的な構造を取り上げ、その後で詩歌を取り上げるといいと思います。

池上 意外です。てっきり谷川さんは逆の考えだと思ひ込んでいました。

「好きか嫌いか」から始める

池上 谷川さんは、小学校などを訪問して詩の朗読もされてきましたね。子どもたちに直接朗読を聞かせたいなどの思いがあったのでしょうか。

谷川 依頼があつて始めたことですが、やはり僕は読者や詩の聞き手の反応がとても気になりますね。つまらないと思ったら「つまらない」と言つてほしいし、面白いと思えば笑つてほしい。詩を書くときも、必ず読者とのコミュニケーションを考えています。

池上 子どもは正直に反応してくれますよね。

谷川 今は詩の朗読などは息子（谷川賢作氏）に任せています。息子は詩の朗読がうまくなりました。

池上 息子さんは音楽家ですね。

谷川 はい。朗読には、詩を読むときの間やリズムがあるでしょう。その感覚が僕に似ています。

池上 子どもたちは、オノマトペの多い詩を喜ぶでしょう。

谷川 言葉には音楽的な要素があるということ子どもたちは本能的に知っているんじゃないかな。子どもの遊びには、昔からそういう要素がたくさん入っていますから。

池上 谷川さんご自身も音楽がずっとお好きだったと聞いています。音楽やリズムと詩というのは深く関係しているのでしょうか。

詩を書くことは生きがい。

いつの間にか、いちばんの楽しみに。

谷川 よく「言葉のリズム」などと言いますが、僕はリズムではなく「言葉の調べ」と言っています。これは、言葉の持つ音楽性のことです。短歌の五七五も調べのひとつですし、短歌は、意味よりも調べが重要なところがあります。

池上 最近、俳句もブームですが、俳句は文字が少なく、その上に季語を入れなくてはならないなど非常に制約があります。あえて言葉で細かく説明しなくても状況を思い起こさせるところは、詩と共通しているような気がします。

谷川 日本では俳句や短歌なども含めて詩歌といいますが、詩と歌は定型であるかないかの違いだけで、本当に親戚のようなものだと思います。「行間

に何かがある」という感覚を生むのが詩ですから。**池上** 今は「行間を読め」ではなく、行間を埋めるようなわかりやすい説明が求められますね。

谷川 先ほども教科書の話がありました、実は教科書に詩歌が載ることも、僕はあんまり賛成ではありません。詩歌は本を買って読めばいい。

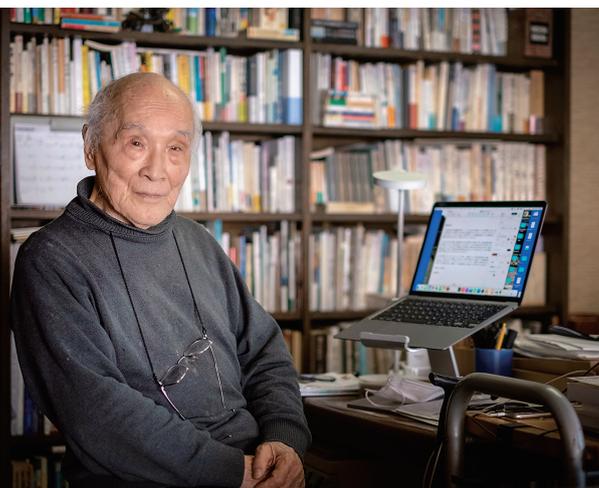
池上 しかし、今も国語の教科書には谷川さんの詩が掲載されています。教科書のはじめのほうに詩が載っていることが多いですね。

谷川 僕の詩が教科書に載っても、綿々とそれを説明する先生がいると、詩そのものが死んでしまう。散文に戻ってしまうんです。だから僕は、学校などで「この詩で何を言いたかったのですか」と先生にたずねられると、「原稿料がいくらか考えていました」と言っただけで済ませました。

池上 では国語の授業ではどのように詩を読み進めるとよいのでしょうか。

谷川 まず先生は、何も説明せずに子どもたちに詩を読ませてみてほしいですね。僕なら、「第一印象でこの詩が好きか嫌いか」というところから始めます。その好き嫌いについて、どこがなぜ好きなのか、あるいは嫌いなのかと子どもたち一人ひとりが考えていくと、だんだん詩のなかに入っていきけるような気がします。

池上 そのようなやり方が感性を育てていくということにつながるのでしょうか。



いつも創作活動をしている自宅の仕事部屋にて。父 徹三氏が使っていた客間を書斎にしている。執筆・推敲ともにパソコンの画面上で行うという。



対談を振り返って

谷川 そう思います。同じ言葉でも、みんな感じ方が違いますから。

池上 朗読は息子さんに任されているということですが、詩を作るといふ仕事は、今も変わらずされていますよね。

谷川 今ではもう、仕事というより、生きがいです。詩を書くことで外界とつながっています。昔は車が好きで、よく車を運転して出かけていましたが、足が不自由になり、運転することもなくなりました。旅行にも出られないからつまらない。だから僕の作品の感想を聞くと、外界とつながっていることが感じられてとてもうれいんです。仕事として詩を書き続けていたら、いつの間にか、詩がいちばんの楽しみになっちゃいましたね。

対談編集／太田美由紀、天然社

谷川さんの詩人としてのデビューの経緯は驚きでした。これはきつと谷川さん流の諧謔の籠ったお返事だと思います。ただ、言葉をうまく操れないときの焦燥感には身が震えます。

でも、「最近の若者の言葉は乱れている」とおっしゃるのではなく、「乱れた言葉が新鮮な場合もある」とのお答えは、常に新しい言葉を開拓しようとしていくからこそその感想でしょう。言葉を使うことを商売にしている私たちは、そんな発想や感性を持っているのでしょうか。

チョコレートの その先へ

Mpraeso(エンプレソ)合同会社
代表社員

たぐち あい
田口 愛

1998年岡山県岡山市生まれ。国際基督教大学在学中の2018年に単身で初めてガーナを訪れる。グラミン銀行などでインターンを経験し、カカオの生産国で品質改善を学んだのち、ガーナでのカカオ豆ビジネスに取り組み。20年にMpraeso合同会社を設立。21年、チョコレートブランド「MAAHA CHOCOLATE」を立ち上げ、ガーナとカカオの魅力を広げている。



甘いチョコレートの先にいる人たち

2018年、19歳のとき、チョコレート好きが高じてアフリカのガーナを訪れ、素晴らしいカカオ農家さんたちと出会いました。それをきっかけにチョコレートを通してガーナと日本をつなぐ仕事に携わっています。

日本はチョコレートの原料となるカカオ豆の約8割をガーナから輸入しています。カカオ農園の多くは村から離れたジャングルのなか、舗装道路もなく収穫した豆を入れた袋を頭にのせて歩いて運び、発酵、乾燥を経て出荷されます。それを焙煎して皮を除いてすり潰すといった加工を経て、砂糖などを加え固めることで甘いチョコレートになるのです。実は、ガーナのカカオ農家のほとんどは、

チョコレートを食べたことがありません。その習慣がないこともありですが、カカオ豆の価格は不当と思えるほど安いので農家の所得は低く、チョコレートを買うことができないからです。逆に日本のショコラティエにも、カカオの実や豆を見たことがないという人がいます。チョコレートは、お互いに「その先にいる人」の顔が見えにくい食べ物なのです。

金銭的ではない「豊かさ」に触れて

初めてガーナを訪れた際、詐欺に遭い、お金もなく、伝手も無い困り果てました。現地の方に助けられ、転がり込んだのが、首都アクラから150kmほど北にあるエンプレソ地域のアマンフロム村のカカオ農家さんです。私は食べ物も分けてもらうような状態で彼らと生活をともにしながら、金銭的ではない「豊かさ」を教えるようになりました。

例えば、真夜中に鳴くニワトリの声で目が覚めた私は「なぜこんな時間に？」と不平がましく質問しました。その答えは、「人が神様に祈るように、ニワトリは夜、ニワトリの神様に祈るのさ」。正しいと思っていた合理的な考え方とは違う価値観に触れて以来、世界が彩り豊かに感じられるようになりました。そして、ガーナで食べたカカオ豆のおいしさに、本当に感動しました。日本から道具を持参していた私は、お礼に農園で収穫されたカカオ豆でチョコレートをつくり、村人に振る舞いました。自分たちがつくったカカオ豆の味に驚き、「こんなにおいしいものは初めて

食べた」と喜んでくれた笑顔が忘れられません。恩返しも込めて、ガーナ産カカオ豆本来のおいしさとともにこの国の魅力を日本に伝えるため、ガーナと日本を往復しています。

ガーナの制度の壁にぶつかる

しかし、品質のよいカカオ豆を農家に売ってもらうところから壁にぶつかりました。農家は自由に業者と取引することができません。ガーナには「ココボード」と呼ばれる政府のカカオ管理局が農家から量に応じて一定額で買い上げる制度があり、例外は許されません。アマンフロム村のカカオ豆を適正な価格で買い取りたい。私は政府の方などと交渉を重ねてようやく、「ココボード」を一度は通すことを条件に、カカオの品質を基準にした価格での独自取引（農家は品質に合った+αの収入が得られる）を認めてもらうことができました。これは同情や援助ではなく、品質のよいカカオにはその対価を払う対等な取引です。どうしてそんなことが可能だったのかとよく驚かれます。現地の人と同じような格好の私がお金持ちのビジネスパーソンに見えず、でも、ガーナのカカオ豆を世界に評価されるものになりたいと真剣に考えていることが伝わったのでしょうか。農家が品質より量を重視してきた結果として、ガーナのカカオ豆は品質にばらつきがでてしまい、それが国際的な低い評価、低い価格につながっていることをガーナ政府自身も気づいており、改革の必要性を感じていたのだと思います。この取引で

写真(左):カカオフルーツの実。現地では実の白い部分を果物として生で食す。カカオ豆はこの中の種。写真(中):カカオ豆を発酵、乾燥ののちに焙煎したもの。発酵や焙煎により風味が変わるといふ。写真(右):ガーナの子どもたちとチョコレートづくり。



カカオ農家さんも品質改善への意識が高まっています。

■ 興味のある方向に踏み出した一歩

チョコレートに特別な思いを寄せようになったのは、戦争や戦後の「ギブミーチョコレート」の時代も経験した曾祖父の影響です。「貴重なお菓子なんだよ」と曾祖父がくれるきれいな包み紙のチョコレートには大切な思いが込められているようでした。私にとってはテスト前や元気を出すときに食べるもの、お守りのような存在です。

中学生の頃、チョコレートの背後に、児童労働などの問題があることを知りました。私が育った岡山では、野菜や果物のつくり手と受け取り側は顔が見えるくらい近くでしたが、チョコレートのは誰も知らない。どうしたらよいかかわからず、子どもながらにモヤモヤをかかえてきました。

大学の入学式、同じ新入生が自分の興味や将来をしっかり考え、話しているのを耳にしました。その頃は自分に明確な目標がなく、自分の好きなことは何だろう?何がしたいのだろう?と必死に考える日々、曾祖父がくれたチョコレートとその向こうにいる人たちが知りたがっていたことを思い出したのです。みんなが知らない、行っていない場所だからこそ自分で行くことに価値があると考え、一歩を踏み出す覚悟を決めました。

■ コロナ禍のチャンス

アマンフロム村のカカオ豆を日本に輸出する準備をしていたころ、新型コロナウイルスの流行で計画を見直す必要に迫られました。渡航もままならなくなり、私がいなくても村の人たちが自立できるような「仕組み」をつくらなくてはと思ったのです。

まず、20年に会社を立ち上げました。そして、この年に多くの方の協力を得て、村に本格的なチョコレート工場を建てるためのクラウドファンディングを成功させることもできました。これをきっかけに東京都内のデパートからバレンタインのイベント出展を誘われ、「MAAHA CHOCOLATE」というブランドを仲間とつくりました。「マーハ」は現地のチュイ語のあいさつで「こんにちは」という意味があります。イベント以外では、インターネットで商品の販売をしています。

22年には工場が完成、今は約10名の村人が実習を経てチョコレートづくりに励んでいます。これはカカオ農家はもちろん、現金収入の仕事が少なかった村の女性たちにとっても大きな意味があります。子どもたちが「将来の夢はチョコレート工場で働くこと」と言ってくれるのも、とてもうれいす。契約の

カカオ農家さんも30人ほどに増えました。私が目指しているのは、カカオ豆以外の原材料も含め100%ガーナ産のチョコレートを現地ですること。そのために足りないのが砂糖です。ガーナにもサトウキビはありますが、

それを砂糖に加工する技術や工場がありません。今、そのための勉強や準備をしています。

■ 自分ができることを

チョコレート売上の一部は、現地のマラリア治療薬の購入や、子どもたちが学校に通う奨学金のための基金にしています。マラリアの薬は300円くらいですが、それを払うことができず亡くなってしまうケースも多く、私自身マラリアに罹ったとき、その300円を払えなかったら、と考えただけで恐怖でした。安い価格で取引されたチョコレートを食べることを通じて、そのような悲劇に自分が関わっていると思うのはつらいことです。

今の私のこの仕事は、大切な家族や友人が困っていたら助けるといふ当たり前のことの延長で、私ができることを続けています。世界の中で何ができるか、とあちこちで聞こえてくる中、大きな課題を考えたとき、自分の存在がちつぽけに感じる人が多いと思います。身のまわりの、隣の友達が困っているときに何ができるかを考え、実行し続けていけば、知らない人、遠くの人に対しても同じようにできる思考につながり、課題に対して行動していけると思っています。

ただ、自分にはできることもあるけど、できないこともある。今は、呼びかければ能力をもつ方たちが共感し助けてくれたり、いろいろなツールを使ったりすることもできる時代です。いろいろな人を巻き込みながら、進んでいきたいと思っています。



駐名古屋中華人民共和国総領事館と岐阜日中文化交流協会の出前授業では、中国伝統の切り紙「剪纸」に児童もチャレンジ。

ここに教育あり

領事館プロジェクト ～キラリと光る津島の教育～



愛知県津島市教育委員会
委員長
教育長
あさ い あつ し
浅井 厚視

領事館プロジェクトとは

愛知県津島市は、名古屋の西側に位置し、ユネスコ無形文化遺産に「山・鉾・屋台行事」の一つとして登録された尾張津島天王祭の街として有名です。津島市では、県内にある8つの領事館を通して、国際交流を行っています。市では、春の尾張津島藤まつり、夏の尾張津島天王祭、秋の尾張津島秋まつり（山車・石探祭車・神楽）に領事館の方たちを招待し、また領事館で開催されるフェアや講演会などに市民が参加しています。人権を尊重し、ダイバーシティ（多様性）を認め合う街づくりを目指しています。

市の教育委員会ではこの方針を基に、キラリと光る津島の教育を進めるため、自分と異なる他者の存在をそのまま尊重する「共生力」（共生力とは、①まわりの人たちとお互いの存在を認め合い、多様な社会を創り上げる、②多面的で多様な見方・考え方ができるようにする、③共に今の時代を生きている共存の感情をもつ）を育てたいと考えています。そのため領事館の方たち、領事館をサポートする方たちを紹介し、8年前から国際

交流活動「領事館プロジェクト」を展開しています。

多様な見方・考え方を育てる

津島市には8つの小学校があり、県内の8つの総領事館・領事館と2年間を期間とした交流を進めています（2年間が過ぎたところで交流相手を交代）。令和4・5年度は、東小がベルー、西小がブラジル、南小がフィリピン、北小が韓国、神守小がカナダ、蛭間小がトルコ、高台寺小が中国、神島田小がアメリカ合衆国との交流を行うことになりました。学校の規模や考え方により、全校体制の交流であったり、高学年のみの交流であったりします。総合的な学習の時間（学校によっては人権総合的学習と言っています）を活用しています。どの学校もその日だけの交流ではなく、領事館本国や紹介する津島の街の調べ学習をした後で交流しており、総合的な学習の時間の一つの単元として活動を行っています。

8つの小学校では、国際交流活動に際して津島の街の紹介をするため、津島の歴史・文化・祭りについて調べ学習を行っています。津島市には歴史学習のための副読

本『語り継ぎたい津島の歴史 津島の達人ジュニア検定公式テキスト』があります。このテキストを活用したり、観光ボランティアの方たちを講師として招いたりするなど、ふるさと学習を行っています。また「学校の歴史」や子どもたちの「遊びの歴史」について発表を行った学校もありました。開校150年を迎えた学校では、校長室に残る当時の写真や校内の記念碑を基にガイドしました。

令和4年度、市内の小中学校に各21体合計252体の人型ロボット、シャープの「ロボホン」を導入しました。プログラミング学習を見える化することが狙いです。このロボットを活用し、英語や中国語、韓国語で挨拶できるようにプログラミングして領事館と交流した学校もあります。

一方、領事館側も出前授業を準備してくださいました。韓国総領事館のハンゲルの言葉に関する授業、KPOPのダンス教室、チヂミの料理教室や中国総領事館と岐阜日中文化交流協会の剪纸教室、その他各国の子どもたちの遊びや食べ物、観光や歴史について、学校のリクエストに応じていただき、楽しい出前授業をしてくださいま



した。時には総領事が、言葉や文化、観光について説明してください。観光についてもありました。

子どもたちは交流活動後、「日本とトルコが仲良しだと知りました。もっと仲良くできるような学びたい」「フィリピンの世界遺産など知らないことが多くて面白かった。海がきれいなので、いつか行ってみたい」などと感想を書いていました。

出前授業を行った領事館の関係者は「昨年に続いて津島市に来ることができてうれしい。互いの文化を理解する機会にしたい。韓国と日本は大切な隣人」「中国の剪纸を上手に作って持ち帰ってね。いつか中国を訪れ、素晴らしい文化にふれてください」などとコメントしていただきました。

フィリピンにルーツをもつ児童を集め、総領事から励ましの言葉を掛けていただきました。また8年間に及ぶ領事館プロジェクトでは、韓国の

現地校の教師と児童が3泊4日の視察旅行で津島市に2日間滞在し、市の古民家に宿泊して、南小との交流会を行いました。歓迎のセレモニーでは、日本と韓国の歌の交歓やダンスの披露を行いました。

また、南小での授業体験では、書道や図工、マット運動やドッジボール、英語の授業、給食に参加していただきました。

この視察では、教師間の意見交流をする機会をもち、平成29年度の時点で、韓国の小学校では一人一台タブレットを活用し、デジタル教科書をつかっていることを知りました。また韓国の給食は、好きなものを何回もおかわりでき、教師と子どもの上下関係がゆるやかであることが分かりました。

トルコ・シリア地震とその後

蛭間小では、令和5年1月にトルコ総領事館との交流を行いました。その一週間後にトルコで大きな地震が起きました。子どもたちは、その被害の大きさを学習し、交流活動を行った6年生が、全校の児童に義援金の募金活動を行いました。「みんなでトルコを助けよう」「何万人の人が苦しんでいます」とポスターを制作し、寄

付を呼び掛けました。「交流会をした後、地震が起き、トルコの子どもたちもがれきに埋もれてしまった。勉強ができる毎日が早く戻ってほしい」と感想を述べていました。集まった義援金は、3月に市の募金箱に寄付されました。

東小ではペルー総領事館との交流会の後、「津島市SDGs未来都市プロジェクト」の発表会を行いました。このプロジェクトの中で「世界中の人とハイタッチ（駅前外国人の方に気軽に話しかける）」「伝統の遊びを体験！日本語教室をみんなでつくろう（津島市の日本語教室で日本の伝統遊び）」「海外のあいさつで日本一（多言語をつかってあいさつ）」「世界のことを知ろう（外国のゲームや遊び）」などの発表ができました。

今後の領事館プロジェクト

領事館との交流活動を継続してきて、本市教育委員会では今後のこのプロジェクトの課題についてまとめました。令和4年度の指導事例集を作成し、5年度のカリキュラムを次のように考えました。

①交流会当日だけの活動で終わらず、学習の継続性を大切に活動する（その国についての学習や津島の紹介、発表が、総合的な学習の一つの単元となることを維持）。

②オンラインを活用し、遠隔でもお互いの顔が見える関係で、交流を継続する（積極的に発信を行うような現地校とのかわりを目指す。フィリピン総領事館からは母国語の学習講座を実施したいとの申し出があり、活動に加えたい）。

③多様性の理解や多文化共生など、国際交流の目的を明確にして活動する（外国にルーツをもつ身近な友達や地域の方とのかわり方を大切にし、SDGsの視点から持続可能で環境や人権に配慮した総合的な学習の展開を進める）。

④交流する領事館と綿密に打合せを行い、それぞれの国の特色となる文化体験ができるように配慮する（できる限り座学ではなく体験学習「ワークショップ」を計画）。

これからも領事館と領事館をサポートする方々の協力をいただきながら、子どもたちの成長に合わせた国際交流を通じた学びを続け、自他を尊重し合う「共生力」を育む活動を続けていきます。

▼150周年を迎える
総合製紙メーカー
王子ホールディングス

私たち王子ホールディングス株式会社は、近代日本資本主義の父とされる渋沢栄一の提唱により1873年に「抄紙会社」が設立されたことが始まりです。今年で創業150周年を迎えました。

「木を使う者は木を植える義務がある」との理念のもと、1930年代から森林の育成に取り組んできました。2022年5月には会社の存在意義（パーパス）として、「森林を健全に育て、その森林資源を活かした製品を創造し、社会に届けることで、希望あふれる地球の未来の実現に向け、時代を動かしていく」を策定しました。長年培ってきた紙づくりと森づくりのノウハウをもとに、再生可能な森林資源を活かした製品を生み出し、化石資源由来のプラスチック等の置き換えなどに取り組みながら、新たな森林資源の可能性に挑んでいます。

▼国内外に広がる王子の森

国内の社有林は、北海道から九州まで約650カ所にあり、総面積は約19万haです。海外でも植林

社会と教育の 架け橋 森と教育

社有林を活かした
環境教育プログラム
王子の森・自然学校



王子ホールディングス株式会社
コーポレートガバナンス本部広報IR部
マネージャー 石井 真樹子

王子ホールディングス株式会社は1873年創業の総合製紙メーカーです。森林を健全に育て、長年培った製紙技術を基に森林資源を活かした製品を創造し、社会に届けることで、新たな森林資源の可能性に挑んでいます。

王子の森・自然学校の概要

対象	・小学4年生～中学3年生（2004～2017年） ・小学4～6年生（2018年以降）		
参加人数	累計1,521人	開催時期	7月～8月
開催場所	2019年までは例年、国内グループ製造拠点2～5カ所にて開催。 ・北海道校（王子製紙苫小牧工場） ・日光校（王子マテリア日光工場） ・西丹沢校（神奈川県三保社有林） ・富士校（王子マテリア富士工場および王子エフテックス東海工場富士製造所） ・広島校（王子マテリア呉工場） ・宮崎校（王子製紙日南工場） ※2021年、2022年はオンライン開催。		
参加方法	公社）日本環境教育フォーラムHP（ https://www.jeef.or.jp/activities/oji/ ）より応募。応募者多数の場合は抽選により当選者を決定。		

主催：王子ホールディングス株式会社 共催：公益社団法人日本環境教育フォーラム等

事業を行い、現在約39万haにまで拡大しています。森林を保有する当初の目的は製紙原料の安定的な確保でした。しかし近年は、水源涵養、二酸化炭素の吸収・固定、土砂崩れの防止、生物多様性の保全など、森林の多面的な機能にも注目しています。

国内社有林の活用法の1つとして、私たちは2004年から小学

4年生以上を対象とした自然体験型環境教育プログラム「王子の森・自然学校」を開催しています。

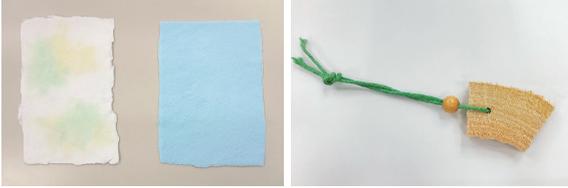
▼王子の森・自然学校の目的

04年の初回以来、東日本大震災が発生した11年、新型コロナウイルス感染症が蔓延した20年を除き、累計17回、毎年開催してきました。19年までは対面による現地開催、21年以降はオンラインで開催しています。

参加する子どもたちには、林内での自然観察や植樹、間伐といった森づくり体験と、製紙工場の見学を通じて、森林と産業、紙との関わりについて、理解を深めてほしいと考えています。「木を切るのは悪いことだ」と思う方々も少なくないと思いますが、私たちは木を植え、間伐（生育の悪い木を間引くこと）等を行いながら育てて伐採し、伐採後は再び植樹をしています。若木の方が老木より多くの二酸化炭素を吸収すること、伐採された木は太い幹は木材として使われ、細い枝や間伐された木は紙の原料になり、余すところなく活用していること等、森林について基本的な知識を伝えたいと思っています。



写真(上)：2019年の王子マテリア富士校での間伐体験。写真(下)：2022年のオンラインプログラムでの紙のリサイクル編・手すきはがき(左)と、森のリサイクル編・木製キーホルダー(右)。(写真提供：王子ホールディングス株式会社(3点とも))



▼現地開催プログラム (2004～19年)

04年から19年までは、国内各地の製紙工場とその近隣の社有林で日帰り～2泊3日間のプログラムを展開しました。プログラム前半では、社有林内で、森林施業に従事する担当者から森づくりの説明を受け、一緒に植樹や間伐体験に取り組みます。加えて、自然観察、木の枝や葉っぱを使った木工クラフト、昼食を兼ねたカレーづくり等を行い、子どもたちは半日ほどかけて森林の中で過ごします。プログラム後半では、製紙工場に移動して工場の従業員に紙づくりの説明を受けながら、紙の製造工程

を見学します。時間に余裕があれば、見学後は工場の原料を使った紙すき体験を行い、紙づくりの工程を復習しながら、子どもたちは手すきはがきづくりに取り組みます。

参加後の保護者アンケートからは「紙は工場でこうやってつくっているんだよ、と家族に教えてくれました。身の回りにある紙を大切にしておう、という意識が芽生えたみたいですよ」「木こりさんと一緒に木を伐ったよ!と話をしてくれました。森の中で過ごしたこと

▼オンラインプログラム (2021～22年)

21年からは1コマ60分間というオンライン形式に切り替えました。現地開催の醍醐味である、森林との触れ合いを通じた森づくりや工場見学による紙づくりをどのようにオンラインで子どもたちに伝えるのか。試行錯誤の末に2つのプログラムを展開することにしました。1つ目は「森のリサイクル編」。プログラム冒頭では、子どもたちは家の中で木製のものを探します。机、鉛筆といった身近な木製品を目の前にしながら、紙もまた、木

できていることを学びます。次に、紙づくりに使われる木という視点から、クイズを交えて森づくりの仕組みや森とSDGsとの関係を紐解き、伐った木の有効活用や森のもつ様々な働きについて学びます。プログラム後半は間伐材を活用した木工クラフト体験です。事前配送されたクラフトキットを使って、木の香りや手触りを感じながら、木工クラフトに取り組みます。

2つ目は「紙のリサイクル編」。プログラム冒頭では、子どもたちは家の中で紙製品を探します。ティッシュペーパーやノート、段ボール：身近な紙製品を手に取りながら、紙が古紙と木からできていることを学びます。次に、クイズを交えながら紙のリサイクルの仕組みや紙づくりとSDGsの関係について学び、製紙工場の動画を視聴します。プログラム後半は紙すき体験です。紙すきセットを使って、動画で見た紙づくりの工程を復習しながら手すきはがきづくりに取り組みます。

と同じ時間を過ごすことができなくなった」というオンラインの利点を評価する声が多い一方、「本当は社有林の体験や工場見学をしたかった」、「実際に森に行ってみてみたい」等の声も少なくありませんでした。さらに、「環境にもやさしく、次世代への教育活動にも力を入れていく素晴らしい会社だな!」と思いました」と、当社に対するイメージが変化したという声も複数寄せられました。

▼今後の展望

オンライン開催への切り替えにより、海外も含む遠方から多くの方にご参加いただくことができました。また、森林と産業、紙との関わりについての学びを通じて、森林資源を活かした事業を展開し、持続可能な社会へ貢献する当社への理解を深めていただくことで、当社のイメージ向上にもつながり、ブランド価値向上のアプローチという役割も果たすことができそうです。今後は社会情勢をふまえて、より多くの子どもたちに本プログラムへ参加してもらえよう、現地とオンラインの同時開催の可能性を探りたいと考えています。

消えゆく歴史を追い、 未来へと発展させていくための糸口を探る



◆略歴◆

- 1989年 北京大学哲学部卒業
- 1998年 日本へ留学
- 1999年 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程進学
- 2001年 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了 修士(学術)
- 2006年 同研究科博士後期課程修了 博士(学術)
- 2008年 東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会外国人特別研究員
- 2012年 ケンブリッジ大学招聘研究者
- 2013年 昭和女子大学人間文化学部准教授
- 2016年 昭和女子大学人間文化学部教授
- 2021年 昭和女子大学大学院生活機構研究科教授

昭和女子大学大学院生活機構研究科 教授
公益財団法人 守屋留學生交流協会 第18回奨学生

ボルジギン・フスレ

に漢人、満洲人、朝鮮人など、さまざまな民族が居住しており、お互いに何民族であるかを問うのはごく普通のことでした。学校に進学する時や何かを申請する時など、登録あるいは提出する書類には必ず「民族」という項目が設けられています。民族意識の高揚は、さまざまな要素によりますが、内モンゴルではこうした社会状況のなかで、人々は自然に「民族」という意識を強くもつようになるのです。

近現代の内モンゴルの歴史・社会・経済・文化などにおいて日本の影響が大きかったということ、小学校5年生の時、モンゴルの文学・民俗を研究している父から教わりました。そして、中学に入った時から、私は日本語を独学で学びはじめ、大学でも第一外国語として日本語を選択しました。北京大学では、「文化熱(文化ブーム)」「反精神汚染運動(ブルジョア精神汚染批判キャンペーン)」「天安門事件」という激動の時代を経験しました。

大学卒業後、私は内モンゴル大学芸術学院の講



※ノモンハン・ブルド・オポー：境界線を示すオポー(堆石)の一つ。

師として、「近現代ヨーロッパ哲学・芸術・文化思想」などの講義を担当しました。講義のかたわら、モンゴルの英雄叙事詩『ゲセル』『ジャンガル』などを素材に、モンゴルの文化・宗教・歴史などについて研究していました。そして、研究を進めるなかで、1930年代から第二次世界大戦の終結までの歴史を、日本人と内モンゴル人が互いに「共有」したことに気づきました。モンゴルをめぐる北東アジアの歴史を再構成することによって、きつと新たな成果が生まれるはずだと信じて、イデオロギー上の制約がなく、かつ研究の蓄積のある日本に留学することを決めました。

◆日本での研究生活◆

私は1998年4月に来日し、翌1999年に東京外国語大学大学院に進学しました。大学院では、北東アジアの枠組みから、近現代モンゴルの民族自決・自立運動と中国、日本、ロシアの対応に関心を持ちながら、「中国国民党・共産党の対モンゴル政策——民族主義運動と国家建設との相

◆はじめて◆

「あなたは何民族ですか？」幼い頃から当たり前のように、こう質問されてきました。というのは、私が中国内モンゴル自治区出身のモンゴル人だからです。清朝半ば以降、さまざまな人々が絶えず移住し続けてきた結果、20世紀の内モンゴルでは、モンゴル人はすでに少数になっていました。私の少年時代、まわりには、モンゴル人のほか

「克」をテーマに、修士論文、博士論文を執筆しました。その間、1999～2001年には、守屋留学生交流協会の奨学金をいただきました。当時、2か月に一度、奨学金が交付されました。奨学金が交付される日は、私はいつも昼には神保町の古本屋をまわり、好きな本を購入しました。その後、日本の歴史と文化、自然に触れられる皇居まで散策し、体も心も癒されたものでした。夕方になると、帝国書院を訪れ、奨学金の交付会に参加したことを、今でも懐かしく思い出します。

◆東アジアの国際関係を見直す◆

歴史認識や資源の利用、領土問題などをめぐって、東アジアに限らず、世界中で、国家、地域間の対立が激しくなっています。視点さえ変えれば、これらの問題から、国際政治の力関係の原点や対立を乗り越えるための糸口を見つけることも可能です。

博士号を取得した後、私はモンゴルと中国、日本、ロシアの近現代史の接点となる諸問題の探求を課題としてきました。主に、モンゴルをめぐる



ハルハ河・ノモンハン戦争の調査をしている筆者（左側）（モンゴル国ドルノド県ネメルグ草原、2012年8月）



チンギス・ハーンの長城：オールドゲルティーン・ゴビーン・ヘルム遺跡（モンゴル国ドルノド県チヨイバルサン郡、2021年9月）。この長城は、遼、西夏、金の三時代にわたって作られたといわれており、複数の防壁などと城壁によって構成されている。ここを発掘調査する。

国際関係、1939年のハルハ河・ノモンハン戦争（ノモンハン事件）、第二次世界大戦のアジアでの終結と日本人のシベリア・モンゴルへの抑留に焦点を当て、歴史資料の発掘と研究に取り組んでいます。また、「チンギス・ハーンの長城」や「匈奴帝国の単于庭、龍城」といった国際共同研究プロジェクトも立ち上げました。その中で、日本とモンゴル、中国を拠点に、ロシアやイギリス、台湾などの国や地域まで足を運び、興味深い歴史記録、遺跡などを新たに発見したり、いろいろな人に話を伺ったりしています。

こうした研究成果を社会に還元しなければと思いい、意見交換の意味もこめて、30回を超える国際シンポジウム、フォーラムを企画し、各国の研究者を招きました。国際会議の論文集をふくめ、編著書を20冊余り出版しましたが、なかなか追いつきません。学問には終わりがありません。

さらに、学問に対する関心を若い世代に喚起するため、日本・モンゴル青年フォーラムを組織し、多くの大学院生や学生に参加してもらってきました。指導した学生たちが課題をやり遂げ、達成感

を得ているのを国際交流の場で見るのは、本当にうれしいものです。

◆モンゴルと日本の架け橋として◆

去る2022年は、日本モンゴル外交関係樹立50周年であり、チンギス・ハーンの生誕860周年でもありました。私は監修者として、日本モンゴル外交関係樹立50周年記念プロジェクト、日本国立公文書館とモンゴル国公文書管理庁共催展示会「日本とモンゴル——綴られた交流のあゆみ——」*に携りました。アーカイブ（公文書）は歴史の記録であり、人類の知的財産です。長い歴史の間、日本とモンゴルは、複雑で密接な関係を持ってきました。日本の国立公文書館とモンゴル国公文書管理庁の職員は、2年以上も前からこのプロジェクトに着手し、準備を重ね、2022年2月24日、すなわち日本モンゴル外交関係樹立50周年の日に同展示会の開会式を迎えました。この展示会では、13世紀から今日にかけての日本とモンゴルの交流の歴史を、精選された両国のアーカイブで綴っています。歴史の対立を乗り越えた日本とモンゴルの経験から何が得られるかを考える本展示会が、今日の国家、地域間の対立、それらめぐるナショナルリズムなどの問題の解決において社会的インパクトを与えること、また、将来、世界各国、各民族の友好と平和の構築に大いに寄与することを願っています。

これからも、モンゴルと日本をはじめ、東アジアの国々が互いの歴史への認識を深め、友好的な関係を築いていけるよう、その糸口を探し続けたと思います。

* https://www.archives.go.jp/about/activity/international/jp_mn50/index.html (2023年5月8日閲覧)

子どもと、ともに



▲中学部の体育でのボッチャの様子。小学部から高等部までの児童生徒が取り組んでいる（2022年）。



▲他校とのeスポーツ交流でオンライン対戦。学校対抗戦は大盛り上がり（2022年）。



▲円陣で、心を一につけ！ 2022年のボッチャ選抜甲子園では全国大会ベスト8に輝いた。



▲2023年のGeA(上毛新聞社主催)では準決勝に進出するも敗退。「より一層頑張ろうと思いました。」と決意を新たに。

「ボッチャ」と「eスポーツ」でコミュニケーション力、主体性を育む

群馬県立あさひ特別支援学校

本校は、群馬県桐生市の東寄りに位置する、小学部から高等部まで、全校生徒85名の肢体不自由の特別支援学校である。2014年度より全学部で「ボッチャ」を、2022年度より高等部にて「eスポーツ」を教育課程に位置づけ、取り組んでいる。

●「ボッチャ」では

全ての学部の体育の授業で「ボッチャ」を扱っている。小学部では「ボッチャに親しむ」、中学部では「ルールに慣れる」、高等部は「競技ボッチャに取り組む」と、発展的に設定している。

3人1組で行うチーム戦に力を入れ、高等部は、6年連続で全国ボッチャ選抜甲子園に参加、3度ベスト8に進出している。ボッチャは、仲間との綿密なコミュニケーションを要するとともに、自分の身体をいかに使うかという、自分の身体とのコミュニケーションが必要である。この二つのコミュニケーションが合致したとき、最大のパフォーマンスが生まれ、最高の結果となるのである。

●対戦型コンピュータゲーム競技「eスポーツ」では

1対1の競技ではなく、チーム戦を中心に行っている。2人1組、3人1組で行う競技に取り組む、仲間と戦術や状況に応じたやりとりを重視し

ている。大会に参加した生徒からは、「負けて悔しかったけれども仲間との絆も深まりとても楽しい思い出ができた。」との感想が、他校との交流を経験した生徒からは、「チームワークなどの改善を皆としていきたい。」といった感想が聞かれた。さらに、交流した他校の生徒からは、「eスポーツを通すと、（障がいがあっても）コミュニケーションを簡単に楽しくとることができることが分かった。」との言葉もあった。コミュニケーションに着目したeスポーツの取り組みが実を結んだことを実感した。

●二つの取り組みの先に

二つの取り組みでは、他者との、そして、自分自身とのコミュニケーションを積極的に行う姿が見られた。教師主導ではなく、生徒同士で工夫し、よりよいパフォーマンスを発揮しようと、主体的に取り組む姿も見受けられた。

生徒が、障がいの有無に関わらず大会に参加したり、積極的に交流したりすることで「障がい」の枠を超えて社会への参画を続けていくことを願う。そして、この取り組みが社会における障がい理解やダイバーシティの促進につながることを期待する。

階【きざし】

2023年6月23日発行 (No.49)

発行人：佐藤 清 発行所：株式会社 帝国書院

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29 電話03-3262-4795(代)

©Teikoku-Shoin Co.,Ltd. 2023 <https://www.teikokushoin.co.jp/>

Twitter ID : @Teikokushoin